〔講演録〕

日本の大学キャンパスからみた世界の歴史

――関西学院大学西宮上ケ原キャンパスと大阪市立大学杉本キャンパス――

北　村　昌　史

1. 世界のキャンパスは個性豊か

この講演では、関西学院大学のキャンパスと私の勤め先である大阪市立大学のキャンパスそれぞれの特徴を説明しながら、世界の歴史を考えていこうと思います（写真 1)。

まず、大学のキャンパスですが、実は結構個性豊かであるということを理解してほしいとおもいます。全世界的にみると、日本の大学のように囲んであって、その中に全てのものが集中しているキャンパスばかりではないのです。

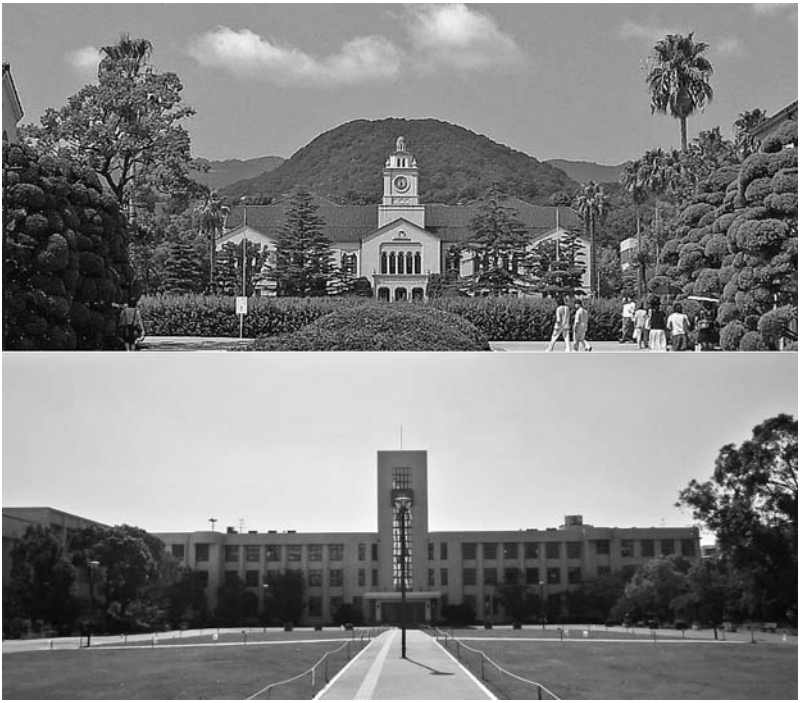
とくにヨーロッパの大学に関していいますと、囲われたキャンパスがないことが実は多いのです。大学の建物が一つの街の中に散在していることが多く、囲われたキャンパスがあって、ここからここまでが大学であるというわけではありません。

このようになる背景の一つとしては、ヨーロッパの大学は街や社会の中から誕生してきたことがあります。ヨーロッパ最古の大学はボローニャ大学ですが、大学で勉強したい人間が教えを請いたい人間と契約しながら大学をつくっていったというのがヨーロッパの大学の起源です。

そこら辺を考えていただくためにいくつかの事例をあげます。

まず、ボローニャの街では、大きめの祠のような石造の建物があちらこちらに見られます。それは一体何なのかということです。実をいうと、昔のボロー

写真 1　関西学院大学上ヶ原キャンパス（上）と大阪市立大学杉本キャンパス（下）



ニャ大学の法学の教授の墓なのです。お墓が、街の広場の目立つ所にあります。ボローニャの人にとって、大学の教授というのはそれだけ身近にいてほしい、あがめ奉るべき存在であるということです。これは、大学が街の中に組み込まれている、逆にいえば街や社会の中から大学が出来上がってきた一つの顕著な例だと思われます。

次に、イングランド最古のオクスフォード大学です。オクスフォードの街の中心にオクスフォード大学の施設が集まっています。一方で、大学の施設と寄木細工のような形で、一般の建物があったり、大きい本屋があったり、商店街があったりという感じで、街の真ん中に大学の施設と一般の建物が共存共栄しています。社会の中、街の中から大学が出来上がってきた一つの現れだと思います。

2000年から、家族でオクスフォードに住んだことがあったのですけれど、そのときに住んでいた家が一体どのような経緯で出来上がったのか、たまたま調べることができました。オクスフォード大学にはカレッジという機構があります。これは日本の大学で該当するものがないのですが、食と住を学生に提供し、さらに一般教養的な教育を責任をもって担当するような施設があります。

自分たちが住んでいた家というのは、オクスフォードのある一つのカレッジが、19世紀の末に地主として賃貸住宅経営をはじめて、建てた家だったのです。オクスフォードという街の中核は大学なのですけれども、それだけではなくて、実は大学が街をつくっていった側面があるということになるわけです。

最後に、ベルリン自由大学という大学があります。これは戦後のドイツ・ベルリンでつくられた大学です。どのような経緯でつくられた大学かといいますと、ベルリンが東西に分裂した結果、元々あったベルリン大学が東に行ってしまったのです。それで、「西ベルリンにも総合大学が欲しい」ということで出来上がったのが、ベルリン自由大学なのです。その大学をつくるときも、わざわざキャンパスを造らないで、ベルリン南西部の郊外に建物をいくつか集めて大学の空間をつくっております。そのような感じで、戦後のドイツにできた大学でも、実はこのように街の中に施設が散在することはあったわけです。

ところで、例外は当然あるわけで、ドイツの大学でもビーレフェルト大学がどのようなキャンパスをもっているかというと、街の郊外に巨大な建物を建てて、キャンパスをつくっています。建物の中に、教室、図書館、研究室のみならず、店舗、食堂、プールなどが用意されています。このように勉学からいろいろな生活にいたるまでが、一ケ所で全て賄えるというキャンパスもあります。

なぜ、この大学がこのようになっているかというと、比較的新しいというのが一つの要因だと思います。1969年設立です。1960年代に、ドイツでは高等教育を拡充するためにいくつかの大学がつくられていって、その一つなのです。そのときに、効率的にキャンパスを運営するために、このような建物がつくられたのだと思われます。ただ、効率的とはいいましたけれども、空間的に

非常に広いので、暖房費がかかってかなわないというのが、ビーレフェルト大学の先生が言っていることです。

とはいえ、ヨーロッパの大学というのは大体、キャンパスが囲われたものではなくて、街の中に建物がいろいろと散在しているということを了解していただければと思います。

それに対して、日本の大学のキャンパスはおおむね囲われていて、ここからここまでは関西学院大学とか、大阪市立大学とか言っているわけです。これは、明治維新以来の近代化の中で、社会や街ではなく、国家、自治体、法人などが大学を設立する主体となったことが背景にあるのではないかと思われます。

ヨーロッパと日本の大学の比較をしましたが、大学のキャンパスそれぞれに、歴史や置かれた社会が反映しているということを、まず了解してください。

2. 関西の大学のキャンパス

日本の大学のキャンパスの話をします。もしも興味をもった場合、実際に見に行けるように、関西の大学のキャンパスの話をしますが、まず、関西学院大学上ケ原キャンパスの説明からしたいと思います。

関西学院大学の現院長の田淵先生が 10 年ほど前に書かれた文章で、上ケ原キャンパスに関して「日本一美しいキャンパス」という表現があります。田淵先生は、すくなくとも関西学院に関わる者にとっては一番美しいと書いておられます。実はそう思っているのは関西学院に関わる人だけではありません。

その一例が、今年度の建築学会賞という賞でしょう。この賞は、建築作品や研究、建築のための活動業績などいろいろな分野に授与されるのですが、そのうち業績部門に関して、関西学院大学に関連する人たちに建築学会賞が授与されました。「伝統的キャンパスの発展的整理――関西学院西宮上ケ原キャンパスのトータルデザイン」というタイトルで賞を授与されています。建築家の中

でも、このキャンパスはきれいであると理解されているようです。

この上ケ原キャンパスですが、いうまでもなくヴォーリズという建築家が基本的なデザインを作り、それが現在まで維持されています。全部が全部ヴォーリズの設計というわけではないわけですけれど、彼の影響がかなり強くみられます。

関西の大学のキャンパスで、他に建築家と名前が結び付く例をこれからいくつかのべていきます。

関西大学千里山キャンパスです。これも実は、ある建築家が中心に設計しています。村野藤吾という人です。1891 に生まれ、1984 年に亡くなった人なのですけれども、現存する建物で一番有名なのは、大阪上本町の都ホテルや京都の都ホテル、志摩のホテルや橿原神宮駅など近鉄関連でいろいろな建物を建てています。実をいうと関西大学千里山キャンパスは、この村野藤吾が設計している建物が結構多いわけです。

千里山キャンパスで村野藤吾の代表的建物は、現在は博物館に使われておりますけれども、元々は図書館で使われていた円筒形の建物です。曲線と直線を組み合わせたようなデザインの中にいろいろな装飾を入れながらアクセントを付けて設計されています。彼は、そのような手法をとっていく建築家なのです。彼はそうした建築を、千里山キャンパスに大体 1949 年から 20 年ぐらいかけて建物を建てていきます。

ただし、このキャンパスは段階を追って造られたので、以前から元々まとまりがないという指摘がされておりまして、要は関西大学のキャンパス自体の一体感のようなものはありません。その後も村野の建物の多くが解体され、代わりの建物が建てられていき、千里山キャンパスは結局は雑多な建築物の集成になってしまっています。

京都大学の時計台にもふれておきます。これは武田五一という京大の建築学科をつくった人が設計した建物です。1925 年に鉄筋コンクリート造りで時計台付きの建物を建てました。これはあとでとりあげる大阪市立大学の時計台と違って、時計台や袖にかなり装飾的な模様を付けていった建物です。武田五一

とその一派、弟子筋たちが京大近辺の建物を設計しているのです。京大に行かれた方は分かると思いますが、現状は極めて雑然としたキャンパスになっておりまして、あまり使いよくもないし、きれいでもありません。この時計台に関しては、後でもう一度ふれます。

大阪市立大学ですけれども、これはまた後で話をしますが、伊藤正文という建築家が 1932 年から最初のキャンパスの設計を担当します。

関西の大学でも、特定の建築家との関連に帰せられないような大学があって、その代表的なものは同志社大学の今出川キャンパスです。このキャンパスは明治以来のものですが、レンガ造りの建物にはじまり、ヴォーリズなども設計に携わっておりまして、いろいろな人が関わっております。ただ、今出川キャンパスは明治以来の伝統がキャンパスの雰囲気を規定しておりまして、最近までは一体的な雰囲気を維持していました。最近、今出川キャンパスに新しい建物を建てて、あれは少し景観を壊したのではないかと私はおもっています。

関西大学と同志社大学はともかく、この上ケ原キャンパスができたのが 1929 年です。京大の時計台ができたのが 1925 年、それから大阪市立大学のキャンパスができたのが 1932 年でありまして、実をいうと 1920 年代から 1930 年代というのは、関西の大学がキャンパスを整備して、その当時にしてみれば結構気合の入った良い建物を建てていた時代だったのです。

他にも具体的にいうと、神戸大学の法学部と経済学部などが入っている、少し高い所にあるキャンパスですけれども、そこに現在も使われている六甲台本館というのがあります。これが 1932 年に造られています。それから大阪大学ではなくて、その前身の浪速高校の建物ですけれども、それが 1928 年に建てられて、現在は大学会館として使われています。これは石橋駅から上がってきて、キャンパスを入って左手に少し高い所にあるものです。

ということで、1920 年代から 1930 年代というのは、関西の大学でキャンパスの整備が結構進んだ時代です。それはいうまでもなく、その時期に日本が高等教育を充実させようとしたという背景があるのだと思いますけれども、一方で実は世界的な建築の新しい潮流を背景にしたものであるということになるわ

けです。

3. 関西学院大学上ケ原キャンパス

話は、関西学院大学上ケ原キャンパスに戻します。すでにもうしましたように、このキャンパスが整備されたのは 1929 年です。建築家はウィリアム・メレル・ヴォーリズという人物で、1941 年に帰化しまして、その後は一柳米来留と漢字表記しています。1880 年に生まれ、1964 年に亡くなった方です。どんな人生をたどったのか。

生まれたのはカンザス州です。アメリカ合衆国のちょうど真ん中です。それから、親の仕事の関係で 7 歳から、少し南のアリゾナ州、15 歳からコロラド州、これはカンザス州の隣ぐらいに移ります。

1905 年に来日しました。そのときは何のために来たかというと、滋賀県立商業学校の英語教師として来たわけです。カルヴァン派の家系に育った彼は元々、キリスト教の宣教活動に非常に興味があったのですが、一応条件が付けられておりまして、キリスト教は普及しないでくれと言われていたのです。けれども、それはほぼ無視してキリスト教の宣教活動をしたところ、やはり条件と合わないということで 2 年で実質クビになるわけです。

ただ、彼は日本に対する宣教活動に熱意をもっておりまして、その後 1908 年、日本で建築事務所を開設します。ただし、彼は実をいうとアメリカ本国でもきちんとした建築家としての教育は受けていなかったのです。ですから、建築事務所を開設したときは、アメリカから本職の建築家を連れてきて、その建築家に支えられてしっかりした建物を造るという形でやっております。

実をいうと、この時代の建築家は結構そのような人が多くて、20 世紀の 3 大建築家の一人といわれているル・コルビュジエも、基本的には建築家としての教育をきちんと受けないまま、世界的な建築家になっています。

1910 年にヴォーリズ合名会社という会社をつくり、この会社は、現在も近江兄弟社として活動を続けています。この会社を中心にしてヴォーリズはどの

ような活動をしたのかというと、まず建築家としての仕事をたくさんします。建築が一番有名になったかもしれませんが、その他、医薬品のライセンス販売のようなことをします。メンソレータムです。ただし、現在、近江兄弟社はメンソレータムを出しておりません。経営がうまくいかなかったときに、メンソレータムの販売権がロート製薬に行ってしまいましたので、今はそれに近いものを「メンターム」という名前で出しています。

それから、輸入業です。代表的なものがハモンドオルガンです。ハモンドオルガンというのは、いろいろな音色が出せる仕掛けが付いたオルガンで、パイプオルガンほど場所を取りません。要は教会に置いておくと非常に便利であるということで、宣教活動の一環であるわけです。

最後に、教育です。今、滋賀県にヴォーリズ学園というものがありまして、幼稚園から高等学校まであります。ただし、彼が活動の軸と考えているのはやはり宣教活動なのだろうと思います。

さて、これはきちんと伝えておかなければいけないと思いますが、ヴォーリズは、建築史上、最近までほとんど忘れられていた建築家でした。要は、30年ぐらい前までは、建築学科の学生や院生ぐらいしか知らないという人だったのです。それが最近になって評価が高まってくることになります。

建築家としては、先ほど言いましたように建築の教育は受けていませんので、やはり素人くささが残るという感じです。実は、私の今回の話の前に、大阪市立大学の工学部の建築史の先生から話を伺って、「ヴォーリズの作品というのは、やはり素人っぽいのですか」と質問したら、「といっても結局、本職の人を連れてきているから、それなりにしっかりしたものになっている」と説明してくださるとともに、「彼の建築というのは、人を受け入れるような優しさがある。そこら辺が、最近評価が高くなってきた背景なのだろう」と言っておられました。

ヴォーリズは専門の教育を受けていませんが、どのような建築を建てようとしていたのか。彼が造ろうとした建築とは一体何なのかというと、大体アメリカで自分が慣れ親しんだような建築様式の建物をそのまま造ろうとしたので

す。それを本職の設計の人に設計してもらって、建物を建てていったということです。

どのような建物に慣れ親しんでいたかというと、生まれたカンザス州はともかくとして、アリゾナ州とコロラド州は実は旧スペイン領であり、そこに導入されていたスペイン風の建築に、彼は幼い頃から慣れ親しんだようです。実際にコロラド大学にいったん入学しているのですけれども、そこの大学のキャンパスも、実をいうと関西学院大学のキャンパスと同じような建物だということです。

彼の建築スタイルなのですけれども、「スパニッシュ・ミッション・スタイル」と総称されるものであるということです。これに関しては最後に参考文献を載せております、山形さんという方が書いておられるのですけれども、スパニッシュ・コロニアル・スタイルというのが一つの背景にあり、もう一つの背景はミッション・スタイルです。

スパニッシュ・コロニアル・スタイルというのは、赤い瓦、白いスタッコ壁(漆喰)、レリーフ、装飾タイル、装飾手すりなどを使いまして、かなりおしゃれな建築です。それに対してミッション・スタイルというのは、伝道の拠点となった教会建築を指すようで、基本的には装飾的な要素はすくなく、正面は大体対称形で、半円アーチが付きます。このような二つの様式を合体させて建てていったのが、ヴォーリズの建築であるということです。

ヴォーリズは、上ケ原キャンパスの建物も基本的にはスパニッシュ・ミッション・スタイルで建てています。上ケ原キャンパスのつくられた 1929 年というのはヴォーリズが建築事務所を開設してから約 20 年たっているところなのです。ヴォーリズの建築ですが、彼は初期から晩年まで建築スタイルがほとんど変わらなかったといえます。建築家もいろいろなタイプがいまして、その当時その当時のはやりをどんどん取り入れて、どんどん変わっていく人が一方でいるのですが、ヴォーリズはあまり変わらない方だと思います。ヴォーリズ建築の初期も晩年も、同じような屋根を造って、同じように直線的な壁で、何となく装飾のいろいろな工夫を取り入れたということで、そういう点ではあまり

変わらないというふうに位置付けられています。

ですから、ヴォーリズの建築は、あくまでも宣教活動の一環であって、そのような立場から建物の理想だというものを建てていったのです。たとえば、上ケ原キャンパスなども聖書の記述に基づいて、後ろの山との配置も考えられています。そういう宣教活動の一環として建物を建てているわけで、決して新しい建築上のトレンドを取り入れようとか、逆にそこから新しい建物はこうならなければならないという議論を自分からした人ではなく、大体 19 世紀末から 20 世紀の頭で、旧スペイン領のアメリカではやっていた様式をそのまま守っていった人なのです。

建築史上忘れられた存在になった理由はこの辺にあります。要は研究者にしましても、それから建築家にしましても、新しいものをつくってくれた人の方が評価しやすいというのがあって、いつも変わらず味のあるものがいいという発想がなかったのです。本当にオーソドックスに自分のやりたいことだけやっている建築家はあまり高く評価されていないということになっていったわけです。30 年位前から、傾向が変わっていったわけです。その背景として、その頃に、あとでふれるモダニズム建築が影響力を失ったことがあげられるでしょう。直線的なモダニズム建築に対して、味のあるヴォーリズの建物が再評価されるようになったと考えられます。

そろそろ、このキャンパスの話のまとめにかかります。上ケ原キャンパスに見られる世界史とは何なのかというと、それは決して同時代の建築上のトレンドを大きく反映したものではないということです。そこで見るべきは何かというと、まず宗教改革以来のプロテスタント宣教活動の一環として、その流れの中で出来上がったものだということです。

それから、北米の植民地を介した建築上の伝統がここに入り込んだということになります。要はスペインというのは元々ヨーロッパ大陸にありますけれども、イスラム教徒が支配し、ビザンツ、それからヨーロッパの建築様式（ロマネスク、ゴシックなど）なども入り込んできたところであり、それが統合されてスペイン風の建物になっています。スペイン人がアメリカに殖民したとき

に、その気候風土に合わせたスペイン風の建物を建てたのが、このスパニッシュ・コロニアル・スタイルになるわけです。

ですから、実をいうと、このキャンパスの建物のデザインは、いろいろな建築様式に合わせようと思えば合わせられます。つまり、このキャンパスの建物に高い塔を建てても似合わないことはないとか、四角っぽく建てても似合わないことはないとか、いろいろなことが融通無碍に受け入れられる建築様式であり、建築様式を勉強する上で、このキャンパスは好都合ということになります。

ただし、このキャンパスが建てられた 1920 年代や 1930 年代の建築上の潮流は、あまり反映していません。唯一反映しているのは何かというと、鉄筋コンクリートで造られたことです。1920 年代になって、鉄筋コンクリートが住宅やいろいろな建物に建材として盛んに使われるようになっていくのですけれども、このキャンパスの建物も鉄筋コンクリートで建てた上で、そこにいろいろな装飾を付けていくというやり方で建てられたわけです。

逆に、当時の潮流を取り入れたキャンパスとして、大阪市立大学のキャンパスをあげることができると思いますので、次に行きます。

4. モダニズム建築

大阪市立大学のキャンパスに反映している当時の潮流は何かというと、「モダニズム建築」と総称される建築様式です。これは 1910 年ぐらいから動きが始まって、大体 1970 年代から 1980 年代でいったん終わりを見せた建築様式です。出てきたのは欧米です。最初に影響を与えたのは、フランク・ロイド・ライトという建築家であり、日本でも帝国ホテルなどを造ったりして、結構大きな活躍をした人です。

モダニズム建築の特徴ですけれども、基本的にはコンクリート、鉄、ガラスを多用する点がまずあげられます。第 1 次世界大戦前までのヨーロッパの建物は木、石、レンガなどを使っていましたので、新しい建築材料としてのコンク

リート、鉄、ガラスが多用されているということです。鉄筋コンクリートなので、いうまでもなく木の枠を造って、それにコンクリートを流し込んで造ります。それで、「モダニズム建築」にはは直線が多くなっていくという大きな特徴があります。

1920 年代のヨーロッパ、アメリカでは、広く大衆のための住宅建設に影響を与えて、モダニズム建築による住宅がたくさん建てられており、この後に話すブルーノ・タウトもその流れの中に位置付けられます。

モダニズム建築の代表的な建築家は、ル・コルビュジエ、ライト、ミース・ファン・デル・ローエ、グロピウスの 4 人です。普通は 3 大建築家と呼ばれることがあって、それが最初の 3 人です。それにグロピウスを入れて 4 大建築家。ル・コルビュジエはスイス出身で、フランスで活躍しています。ル・コルビュジエというのは最近、上野の美術館が世界遺産に登録されましたけれども、1920 年代から本格的に活動をはじめて、20 世紀的な集合住宅のいろいろな試みをした人です。ライトは先ほど言ったようにアメリカ出身の建築家です。ミース・ファン・デル・ローエはドイツ出身の建築家ですが、ナチスが政権を取った後しばらくしてアメリカに亡命します。グロピウスも同じで、ドイツの建築家なのですけれども、アメリカに亡命していった人です。

そうしたモダニズム建築の動きの中で、大阪市立大学のキャンパスが整備されていくことになります。1930 年代前半にキャンパスが整備されて、1 号館、2 号館、3 号館、体育館、そして図書館が建てられます。

写真 1 でお見せした、大阪市立大学の 1 号館は、直線的な建物です。余談ですが、1 号館の前にヤシの木が、29 本並んで立っていたのですが、今年の夏に切られました。50 年の樹齢があったのですけれども、そろそろ倒れてしまう危険性があって、建物に倒れていくとか、通行人や車にぶつかる危険性があるといわれました。

1 号館が、完成したのは 1932 年で、ほぼ時期を同じくして 2 号館が建てられ、これはまだ使われています。2 号館も小さいながらも時計塔があります。3 号館は十数年前に老朽化で壊されまして、現存していません。2 号館と 3 号

館の間に体育館です。今見てみると何の変哲もない体育館なのですけれど、コンクリート造りというのはそれまでなかったので、新しい試みとして新鮮だったのではないかと思います。この 3 つの建物は、1 号館から少し離れた場所に立っています。

図書館は、1 号館のそば、正面からみて左側に直角方向に建っています。図書館の建物の奥の方にかつての入り口があり、ここに丸いベランダと丸い屋根があって、さらに小さな塔のようなものを設けて、設計者としては船をイメージして造ったということです。船をイメージして、ここから先に物事が進んでいくというところに、昔、入り口があったということだったようです。今は学生用の窓口のある事務用の建物となっています。図書館の後ろに書庫があったのですけれども、それについては後でとりあげます。それまで何もなかった杉本町のキャンパスの辺りに、大阪市立大学の新しいキャンパスが造られたわけです。

大阪市立大学のキャンパスを設計したのは伊藤正文という人であり、当時、大阪市の土木建築課に勤めていた人です。この人は早稲田大学を出て、大阪市に勤めていました。大阪市立大学に縁が深くて、戦後の 1949 年に大阪市立大学家政学部、今は生活科学部といっているのですけれども、そこの教授に赴任します。多分、調べればこの人が責任をもって建築したものはもっと出てくるかもしれませんが、基本的には役所の一員として設計活動に携わっていますので、本当にどの程度実際に造っていたのか分からないところはあります。一番有名で現在も使われているのは、大阪の天王寺にある大阪市美術館が彼の設計になります。

この人は、先ほど言ったモダニズム建築を導入していこうという動きの中で活動していました。その動きの現れが日本インターナショナル建築会という 1926 年に作られて 1933 年に解散する団体です。伊藤は、この団体の一員です。この団体のもと京都中心に建築家が集まりまして、モダニズム建築を日本にも導入しようという試みを盛んに行います。雑誌を出し、日本人の会員だけでなく、海外の会員を募っています。形だけだと思うのですけれども、グロピ

ウスやブルーノ・タウトなどが一応海外会員として参加しています。

これからブルーノ・タウトという別の建築家の話をしていくのですけれども、彼は1933年、日本に亡命してきます。なぜ日本に来たかというと、日本インターナショナル建築会の人が、ドイツにいられないなら日本に来てもらえないかと呼んだからです。

なぜブルーノ・タウトの話をこれからするのかというと、私が最近、ブルーノ・タウトの研究をしているからというのが一つあるのですけれども、もう一つは、これから大阪市立大学の建物とブルーノ・タウトの建物を比較してみると、似ているという話をしますので、それでつながっていくわけです。ただし、似ているというのはどのような理由なのか、具体的に伊藤さんが設計したときの考えが残されているわけではありません。そのため、タウトの設計した建物というのは1920年代に盛んに日本に紹介されていたのですけれども、それを見て取り入れたのか、それともコンクリートを使った建物を建てると大体同じような発想で建物を造ってしまうからなのか分からないのですけれども、とにかく似ています。

ブルーノ・タウトは、1880年にケーニヒスベルクに生まれます。これはたまたま一致したのですけれど、ヴォーリズも1880年生まれなのです。生年まで一致するのは偶然なのですけれども、モダニズム建築の新しい傾向の建築家は大体1870～1890年代に生まれているのです。ケーニヒスベルクは、ドイツ帝国の一番東の端辺りにあるわけです。現在はロシア領のカリニングラードとなっておりまして、ドイツではないのですけれども、そこで生まれます。

その後、いろいろな教育を受けて、建築家の修業をして、1908年にベルリンで開業します。これもたまたま偶然なのですけれども、偶然を喜んでしまうのが歴史家なのかもしれませんが、ヴォーリズも建築事務所を開業したのが1908年と、何か似ていると思います。1908年にベルリンで開業していろいろな建築活動をはじめますが、第1次世界大戦が勃発しますと、基本的には建築家としての仕事はなくなります。

1919年になって戦後になり、マクデブルクという街で建築顧問官という役

職に就いて、都市計画の責任者になります。ただし、この当時のドイツの経済状況は崩壊していたので、ほとんど何もできませんでした。唯一評判を取ったのは、街の中心部と郊外にある建物にめちゃくちゃな色を塗らせたことです。本人の趣味ではないですが。街の中心部の建物は、第2次世界大戦の爆撃でひどく壊されてしまったので残っていないのですけれども、郊外の住宅は残っていて、何を考えたのか、当時の彩色を再現しております。

1924年にベルリンに戻り、ベルリンの住宅建設に従事します。その間、1万2000戸の集合住宅の部屋を建てました。当時のベルリンで、住宅政策の中で造られた住宅の数が約13万でしたので、1割弱をブルーノ・タウトが設計したことになります。

1932年にモスクワに移ります。なぜかというと大恐慌になり、建築家の仕事がなくなってしまったので、恐慌がないという噂のソ連に行き、そこで住宅建設をやらせてもらおうと思ったのです。けれども、ソ連の仕事の進め方や、要求されていることとの折り合いがつかなくて、ほとんど仕事をしないまま1933年にいったんドイツに帰国します。

その直前にナチス政権が誕生しているのですが、ナチス政権に近い人物から「あなたはブラックリストに載せられています」と伝えられます。なぜブラックリストに載っているかというと、ナチスがモダニズム建築を嫌ったので、そういう傾向のある人を排除しようとしていたからです。結局、1933年、日本に亡命を余儀なくされます。その後、日本では建築家としての仕事が全然回ってこなかったので、日本文化論の本をたくさん書いて、それらは現在でも読み継がれています。

1936年、トルコに移住し、建築家としての仕事をたくさんしたのですけど、無理がたたったのか、1938年に亡くなります。58歳でした。

これから、タウトの設計した建物と大阪市立大学の建物の共通点を語っていきます。タウトの建築というのは、当時のモダニズム建築全般の影響をうけています。コンクリートの建物は基本的には枠に入れてコンクリートを流し込んでいきますので、下手をすると極めて単調な箱にしかならないのです。現在で

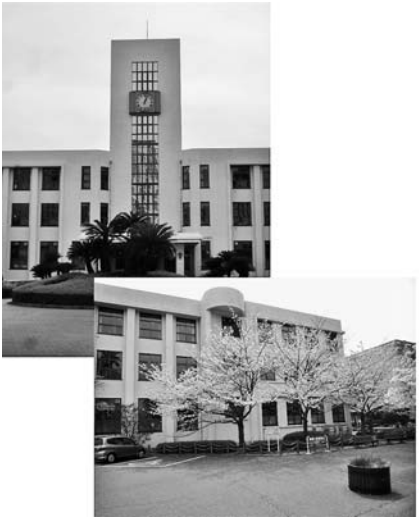
もたとえば装飾タイルを張るとか、少しデザインを変えるなどしていますけれども、1920年代ではタウトだけでなく、モダニズム建築を営んでいる建築家も、どうやってアクセントを付けるかということをいろいろと考えたわけです。その際、上ケ原キャンパスや京都大学の時計台のように装飾的に処理せず、工法の工夫により建物にシンプルに変化をつけようとします。

たとえば、公共施設などでピロティと呼ばれる空間がつくられます。要は1階の部分を上に上げて、そこは広い空間にして、上の方は普通の構造物にするようなことがとりいれられたのがこの時代なのです。もっと単純に円や斜線を建築デザインの中に入れることも結構試みられています。

写真2の右が、タウトの設計した建物で一番デザイン的に派手な部分で、一番説明しやすいものです。ちなみにタウトのモダニズム建築家の中での一番大きな特徴は、色にこだわったことです。普通、モダニズム建築家は建物を白か灰色にするのですけれども、彼は青、緑、黄色などの色を平気でどんどん塗っていきます。

ですから、この色の部分はあまり見ないでほしいのです。この建物の赤いと

写真2　円や斜線を入れたデザイン



シェーンランク通り（1926-1927）

ころが階段室になっているわけですけれども、その脇が微妙に斜めになっているのが分かっていただけると思います。要は、木枠を斜めに置けばいいだけですから、簡単にできるわけなのですけれども、同じ工夫が大阪市立大学の時計台の脇のこの部分、少し分かりづらいかもしれませんが、斜めになっています。これは、時計台のもつ奥行きや存在をはっきりさせるための工夫だと思われます。

ただし、この部分の教室は若干使いづらいのです。教室の中が斜めに切られていますが、斜めの椅子や机があるわけではありませんから、四角で置きます。すると、一番奥は非常に通りづらい配置になってしまいます。建物の外だけを考えて、中を考えていないのです。

それから、両翼のそれぞれ中より、壁面の一番上のほうにベランダのようなものが丸く造ってあります。丸いパーツを入れて、直線だけにしないで丸を入れています。この下に、各階ごとにベランダがあるわけではなく、しかも雨よけにもなりません。要は、曲線を入れるためにわざわざ、このようなものを入れていることになるわけです。建物の側面に丸いベランダが造られているのですけれども、実をいうと飾りだけのベランダで、建物の中から出られないのです。私は「出られずのベランダ」と言っています。

タウトも写真 2 の右の建物のベランダを丸く処理しています。タウトの代表的な建築の一つで、世界文化遺産になっている馬蹄形ジードルングがあります。馬蹄形というのは、馬のひづめの形をした構造物を中心にして住宅街を造ったからです。ジードルングというのは、当時のドイツ語で住宅街のことをいう言葉です。馬蹄形ですから、建物の側面が微妙に曲がっています。こういう工夫が、実は大阪市立大学の建物に反映されていることになります。

それから、デザイン上の工夫がいろいろ試みられていて、これが大阪市立大学の建物にも共通しています。タウトは、写真 3 の左側の集合住宅の建物の前面を、真っすぐにすると単調になるので部分部分を前後させて、街並みの線をあえて凸凹させています。右側はシラーパルクといって、これも世界文化遺産になっています。コンクリートで造った上にレンガを張っているのですけれど

写真 3　デザイン上の工夫

ライネ通り（1925-1928）　　シラーパルク（1924-1930）

も、レンガですので、どちらかといえば横の線が強調されていきます。そうしたところにあえて、ベランダに何の意味もない縦の構造物を入れるとか、窓枠に白い縦の線を入れるという工夫をしているわけです。

大阪市立大学の建物も似たようなことをしているわけです。まず、写真 3 の下のほうで中心の部分と両端の部分で、建物の前面が少しずれているのが分かっていただけると思います。これはあえて、ずらしていると思われます。よく考えると、前にずれている部分には大きな教室があります。次に、さりげなくですけれども、時計台の脇の部分、窓の脇に縦の構造物が設けられて、縦の線を強調しています。これは時計台の高さを強調するためのものと思われます。建物のわきのほうは横の線がずっと入れてあります。これは、横の線を入れることで広がりを示すような工夫をしているわけです。といった形で、実は結構いろいろと共通している点があるということです。

それから、階段室です。1 号館の時計台もそうですが、タウトの集合住宅も階段があって、階段室をきれいに造っています。写真 4 を見ていただくと、上から下までガラス窓を並べています。これが可能になったのは、実はモダニズム建築の時代が初めてです。つまり、レンガ、石、木の時代は構造計算がしっかりできないので、ガラスというもろい建材に力がかからないように造れるかどうか分からなかったのです。モダニズム建築になってはじめて、このように

写真 4　階段室

馬蹄形ジードルング

ライネ通り

縦にガラス窓を通すことができるようになったのです。それで階段室がモダニズム建築の象徴の一つになっています。上から下までガラスにする必要はないのですけれど、要はみんなが一緒に使う共有のスペースの透明性を確保していこうということではないかと思われます。

写真 5 も 2 階建てなのですけれども、階段のところに上とから下までガラスを使って透明性を出しています。ちなみに、私は 2000 年から 2011 年にかけてベルリンに住んでいたのですけれども、これはそのとき住んでいた家の写真です。タウトの代表的な作品の一つで、森のジードルングと呼ばれた住宅地です。タウトの建物に住みたいと、あちらこちらの住宅関連会社に手紙を書いたら、真っ先に返事が来たのがここで、ここに入ったのですけれども、このような感じで 2 階の部分でもきれいにガラスで透明性をつくることをしています。

写真 6 で建物の角の処理についてお話しします。これも構造がしっかりと計算できるからできる芸当だと思います。カール・レギーンというのはタウトの代表的な建物の一つであり、これも世界文化遺産になっています。建物の角のところに窓を直角に造ることで、装飾性を高めるような工夫をしているのですけれども、実は大阪市立大学の建物でも、同じ工夫がされています。旧書庫の

写真 5　森のジードルング

写真 6　建物の角

旧書庫　　カール・レギーン（1928-1930）

階段の踊り場のところが、このように直角に窓ガラスが造られており、同じような印象を得るような構造物になっています。

旧書庫の壁を別の角度から見ると、実はこのように装飾的にきれいに造って

写真 7　旧書庫

います。最小限の工夫で最大限の効果を出しています（写真 7)。階段の踊り場に直角に窓ガラスを組み合わせたのですけれども、それとは段違いにフロアごとの窓を設けています。四角い窓を造って、丸い窓を造って、縦の線を入れて、これは装飾的に考えて造ったものであると思います。階段室の窓と各階の窓がずれているのは、タウトの集合住宅でもよく見られます。

旧書庫の別の面にあるのがこういう壁面で、書庫なので窓を小さくして、外側にも補強用の構造物を造っているのです。これは少し分かりづらいのですけど、下の方に行くにつれて補強部分が厚くなっていて、上の方が狭くなっていくような仕掛けをしていまして、それが結果的にかなりきれいな外観をもたらしているということです。

先ほど見ていただいたカール・レギーンの部分というのは、元々どういう構造物なのかというと、空間的に突き出ているという点で、象徴的な場所として造られるものです。具体的にどういうことかというと、道路に囲まれたブロックの中を全部「ロ」の字型で埋めないで、「コ」の字型にして、1 面だけ空けておくのです。その結果として突き出た部分が、通りのこちら側に六つ、反対

側にも六つ並んでいます。四角いものを突き出しただけでは単調になって面白くないので、直角に窓を組み合わせ、ベランダを突き出す形に作ってあります。その結果、通りから見たら非常に近未来的な楽しい空間が出来上がっているわけです。

旧書庫のこの壁面も、同じ機能が期待されています。空間的に突き出ています。ただし、大学に入ってきた人に対して空間的に突き出ているのではないのです。要は正門から入って見ても、旧図書館に遮られていて見えません。これが本来見えるのは、1 号館の教室からということになります。この面は、推測なのですが、1 号館から直角に造られているのですが、そのため教室ごとに見える光景が違っていきます。この建物に一番近い所から見ると、装飾的な壁は見えなくて、踊り場の窓の 1 号館側だけ見えます。一番遠い所では、壁の全体が見えるという仕掛けになっているのではないかと思うのですけれども、それが、実は今、ほぼ見えません。この点については、後でまたのべます。

5. 建築上の新しい流れ

という感じで、大阪市立大学の建物というのは何かというと、当時のモダニズム建築の影響を多分に受けた建物であったということになるわけです。ただし、モダニズム建築の日本と欧米の相違は言っておかなければなりません。第 1 に、窓の上の庇です。これはヨーロッパ、すくなくともタウトの建物ではこのようなものは造られません。多分、雨に対する感覚の違いだと思われます。第 2 に、基本的に日本では、こういう建物は公共建築を中心に建てられます。ヨーロッパでは主に集合住宅に使われています。実をいうと日本の住宅建設にモダニズム建築が影響を与えだすのは、第 2 次世界大戦後になってからです。

同じ「モダニズム建築」が欧米と日本で現れ方が違うのはなぜなのかという問題を考えるためには、結局、ヨーロッパと日本の住宅や建物を支える要因が全然違うということを指摘しなければなりません。日本は基本的にこの当時まで木造の長屋式ですから、そこから何階建てかの集合住宅まで話が飛んでいく

のはちょっと距離があるという問題もあります。実は住宅を考える上でより大事なのは、ヨーロッパやアメリカでは各種ライフラインの整備がモダニズム建築による集合住宅を支えていたということを言わなければならないわけであります。

私はベルリンを中心に研究しているのですけれども、ガスが整備されたのは1825年です。上水道は1854年、下水道は1876年、電気は1884年に整備されていきます。他のヨーロッパの大都市も似たようなものです。

これで一体どのように変わっていくかというと、19世紀の初頭の段階では、人々の生活は、今から想像もつかないところですが、要はスイッチを入れたら電気がつく、蛇口をひねったら水が出る、汚水は勝手に流れていくという施設はなかったわけです。具体的にいうと、薪や油をどこかから手に入れて、自力で下からもっていって、暖炉で燃やしたり、ランプをつけたりします。水も下でくみます。エレベーターが住宅に使われるようになるのは20世紀になってからですから、階段を使って人力で運びます。

トイレはなく、簡易便器に用をたします。排泄物は窓から出したのです。これも証拠ははっきりしていないのですけど、他はあまり考えられませんので、そうしたのでしょう。これでもよかったのはなぜかというと、ヨーロッパは空気が乾燥していますから、多分、耐えられたのだろうということと、街の中に家畜などがたくさん放し飼いにされていたので、路上に糞尿があっても、不思議ではないということなのだと思います。とはいえ、人口増加に伴って建物の構造が変わらざるをえなくなります。

19世紀前半に造られた建物が図1の右上なのですけれども、大体このように小さい感じで、1階に3軒ぐらいの住宅が入っているようなものです。これが、ベルリンの19世紀後半ではどんな建物が造られたかというと、左下のような感じで、1フロアで12軒入っています。建物がいくつも並んでいますので、道路のブロックの中にたくさんの建物が建て込んでいるという特徴があります。19世紀前半の建物は、一つの建物で大体12軒ぐらいなのですけれど、19世紀後半になりますと1フロアで12軒、建物の大きさが違うので簡単に比

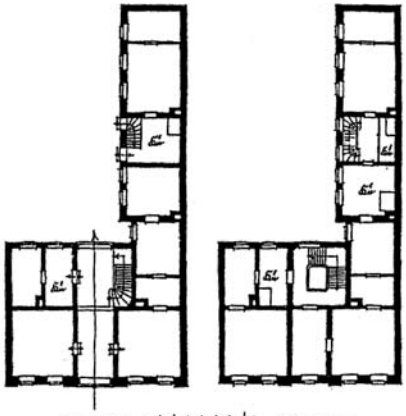


Abb. 38. Grenadierstraße 23.

19世紀前半

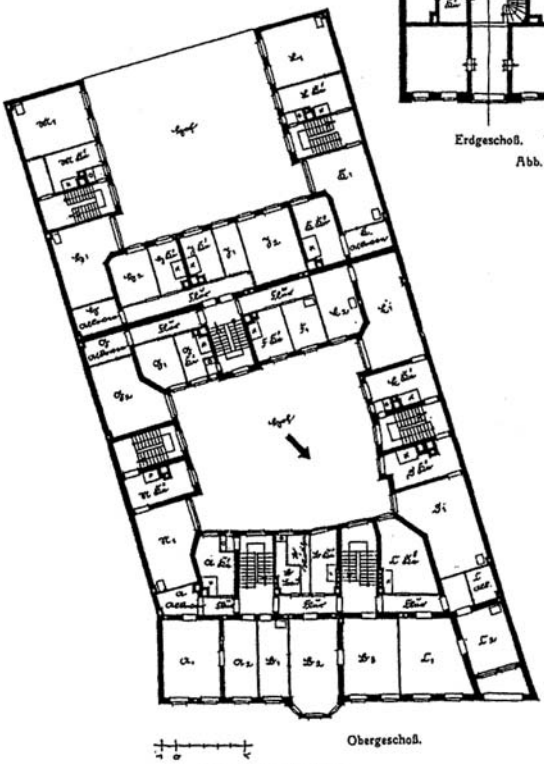


Abb. 52. Yorkstraße 53.

19世紀後半（1870年代）

図 1　19 世紀前半と 19 世紀後半の住宅の典型例

較はできないですけれど、これが 5 階建て、6 階建てになりますから、ここに住む人間というのは、19 世紀の初頭に比べると 5 倍、6 倍に膨れ上がっていきます。5 倍、6 倍に膨れ上がって、それとともに人間が出す物も当然、5 倍、6 倍に膨れ上がるわけです。当初は上下水道はなかったので、トイレはまだありません。そこで、とくに排泄物の処理に関して急速に限界が来て、耐えられなくなったわけです。

なぜ、このような建物が出来上がってしまったのかというと、基本的に公共交通機関のようなものがなかったからです。19 世紀末までは、徒歩が主たる交通手段でした。ですから、新しい住宅を人口増に伴って建てようとしても、結局、遠くには造れないのです。元からあった街並みのすぐ外に、巨大な建物を建てて対応するしかなかったのですけれども、実際に造ってしまうと、すさまじい事態になったわけです。

それではいけないということで、急速にライフラインが整備されていきます。1 世紀前には鉄道など存在しなかったところへ、鉄道網が整備されていくとか、上下水道がなかったところに上下水道網が整備されていくということになります。

実は、このようなライフラインがあってはじめて集合住宅としてきれいなものが安定して造られるようになっていくということです。要は、鉄道で郊外の安価な土地とのアクセスがよくなる、スイッチを入れたら電気がつく、蛇口をひねったら水が出る、ガスの火がつく、出した物は下水道が運び出してくれるというものがあってようやく、5 階建て、6 階建ての建物で人々が安心して暮らせるようになるわけです。

それに対して、日本では違うわけです。たとえば大阪市の例でいいますと、電気は 1889 年、ガスは 1897 年、水道は 1895 年に作られます。ただし、下水が大幅に遅れて 1940 年になります。これは江戸時代以来の伝統で、人間が出した物は大事にして、農家にもっていって、農作業に使っていくというシステムが出来上がってきたので、それをいじれなかったというのがあると思うのですけれども、一方で上水道と下水道のどちらが金がかかるかというと、下水道

の方が金がかかるわけです。何が流れてもいいように作らなければならないわけですから、頑丈に作らなければいけないので、後回しにされていたという事情があります。

大阪で初めての下水は、1940 年に作られます。西成区津守にある下水処理場です。逆にいえば、この前の段階で、集合住宅で大きいものを日本に建てようということは、なかなかできなかっただろうと思われます。同潤会アパートという、関東大震災の後に東京の方で造られたモダニズムの集合住宅の試みがありますが、これぐらいが唯一例外であり、基本的には日本ではまだ、生活の面でも、ライフラインの整備の点でも、集合住宅をモダニズムで造っていこうという背景は出来上がっていなかったということになります。

6. キャンパスの美観

話の終わりにキャンパスの美観についてふれておきます。

まず、キャンパスの混沌ということで京都大学の話をします。第 2 次世界大戦後日本の大学キャンパスの多くは、基本的には工学部の建築の先生やゆかりの建築家の腕の見せどころであり、その結果としていろいろな建築様式が無秩序に入っていくわけです。こちらにガラス張りの建物があるかと思えば、こちらにはコンクリート打ちっ放しの建物があるという感じで、いろいろなものが混沌としています。

しかも最近、あまりにも秩序だっていないと思ったのが、京都大学の時計台です。時計台の裏側に、かつて大きな教室があったのですけれども、それが古くなったので取り壊して、何を考えたのか、本体とは合わないガラス張りの建物を平気でくっ付けています。京大は、他にもキャンパス全体が雑然としています。

わが大阪市立大学に対しても、文句はたくさんあります。写真 8 の左からみると、ヤシを切って、今は芝生を養生しているところなのですけれども、1 号館の右側に、樹木で分かりづらいですが変なデザインの建物があります。直線

写真 8　キャンパスの混沌（大阪市立大学）

的なデザインの 1 号館の隣に、何かよく分からないデザインがあるのですけれど、これはガラス張りの高原記念館といいまして、21 世紀になってから建てられています。その奥に 20 年ほど前に建てられた法学部棟という 11 階の建物で、この建物と 1 号館の調和はどうも考えられていない節があります。

もう一つ言いたいのが、先ほどからデザイン性が高いと指摘した、書庫の壁面ですけれども、すでにのべましたように 1 号館の教室からは見えません。一番見えている教室から撮った写真が写真 8 の右のほうです。見えないのはなぜかというと、右手に学生のサークルボックスのような建物がくっ付けられている部分はあるのですが、それとは別に左手に一つ別の建物がありまして、これが完全に書庫のこの部分と 1 号館との間をふさいで、非常に装飾性が高くて素晴らしいと言っている部分が教室から見えないのです。ここは奥まった空間になっているので、大阪市立大学の学生は、4 年間で卒業して、ここに何かあると気付いた学生はほとんどいないのではないかというぐらい、非常にマイナーな存在を強いられているわけです。このようなことを平気で普通の大学のキャンパスはやっています。

私は最近、学内の建物ツアーなどで案内する機会があるのですけれど、邪魔

になっているこの建物の前に来たときに必ず言うことは、「この建物を壊してほしい」ということです。この建物を壊そうと思っても、実は数年前に改装したばかりです。しかも、使っているのは学長さんなのです。ですから、ここで大きな声で学長さんに聞こえるように、「この建物は壊した方がいいです」と言うのですけれども、届いていないでしょうね。

最後に、関西学院大学の上ケ原キャンパスに話をもう一度戻しますが、建築界から超然としたヴォーリズがつくったマスタープランがあります。最初に超然としたものを素人くさい彼が造ったことで、温かみのある空間が出来上がってきて、それがその後のキャンパスの中で大きな支配力をもって、現在もキャンパス全体を彼の世界が規定しているのではないかというふうに思います。私は、このキャンパスは非常にきれいだと思いますので、皆さんも大事に思って、学生の方は 4 年間学んでいただければと思います。以上で、用意した話を終わります。

参考文献

山形政昭「関西学院キャンパスの建築（上）」『関西学院史紀要』1、1991 年。

山形政昭「関西学院キャンパスの建築（下）」『関西学院史紀要』2、1992 年。

山形政昭監修『ヴォーリズ建築の 100 年――恵みの居場所をつくる』創元社、2008 年。

田淵結「ヴォーリズと関西学院――重なり合うそれぞれのあゆみ」山形政昭監修『ヴォーリズ建築の 100 年――恵みの居場所をつくる』2008 年。

田淵結「関西学院とヴォーリズ」『関西学院史紀要』23、2017 年。

中嶋節子「大阪市立大学杉本キャンパスの近代建築について――近代モダニズム建築をめぐる一考察」『大阪市立大学生活科学部紀要』48、2000 年。

石田潤一郎監修『関西のモダニズム建築――1920 年代－60 年代、空間にあらわれた合理・抽象・改革』淡交社、2014 年。

アンドレアス・ベルナルト『金持ちは、なぜ高いところに住むのか――近代都市はエレベーターが作った』（井上周平・井上みどり訳）柏書房、2016 年。

拙著『ドイツ住宅改革運動――19 世紀の都市化と市民社会』京都大学学術出版会、2007 年。

拙稿「『史料』に住む――ブルーノ・タウト設計の『森のジードルング』」『ウェンディ』298、2014 年（『団地再生まちづくり 4――進むサステナブルな団地・まちづくり』水曜社、2015 年に再録）。

拙稿「ブルーノ・タウトに関する研究の動向」『史林』100-3、2017 年。

写真・図版出典

写真 1 の上の関西学院大学キャンパスは、ウィキペディアより。残りは筆者撮影。
図 1 拙著『ドイツ住宅改革運動』71 頁。